『経営学論集』，第14巻　第3号，41-56，2004
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *KEIEIGAKU RONSHU*（*BUSINESS REVIEW*）Vol. 14, NO. 3, 41-56, 2004

〔研究ノート〕

原野の俳人・長谷川光二――牧場経営と俳句人生と

伊　藤　重　行

はじめに

平成14年10月から平成15年3月まで実施した「明治・大正期におけるユートピアの研究」を通じて，石川三四郎や望月百合子と交友関係にあった長谷川光二を調査，研究をしてみた。石川三四郎や望月百合子は，大正末期から昭和初期にかけて，当時の東京府多摩郡千歳村八幡山に住み，土民生活をしながらアナキスト（無政府主義者）の活動をしていた。その一方長谷川光二は，釧路湿原の北側・チルワツナイ（「鶴のたくさん棲む沢」の意味）に住み，牧場経営に邁進，原始林を開墾し，419町歩の土地を獲得し，大地に立ち，汗を流し，堂々と牧場経営をしていた。自然の大地で森の精気を取り入れ，宇宙を感じる生活を享受しながら，多くの俳句を詠む人生を送っていた。このことから長谷川光二は，原野の俳人と言われる。彼の人生の生き方から得た教訓は，厳しい労働や困難を切り開く人間には，肉体の訓練と同様に，精神や心の鍛錬，精錬された人生哲学，理念などが相伴っていなければならないということである。長谷川光二は俳句を詠むことによって精神や心の哲学を形成していたと言える。俳句を一方で楽しみながら，他方で牧場を経営していたのである。また精神の統一のために長谷川光二は，生涯を通じて，岡田虎二郎を師匠とした「静坐」（正座の一流派）を人生の哲学としていた。

Ⅰ．生きる意味の追求と生活の探求者としての長谷川光二

1．原野の詩人・更科源蔵，原野の画家・坂本直行，そして原野の俳人・長谷川光二

長谷川光二は，原野の俳人であった。弟子屈には原野の詩人の更科源蔵，十勝には釧路生まれの原野の画家坂本直行がいた。長谷川光二は，原始林を開墾し，長谷川牧場を作り上げる過酷な労働の一方で，日々俳句を詠み，楽しんでいた。長谷川光二のその精神は，鶴居村チルワツナイの光二村を単に労働の場だけではなく，文化の場，さらに奥様の音楽の香り（奥様の道子はピアニストであった）と一体化して美しい光二村に作り上げたと言える。長谷川光二を狭

く言えば俳人，広く言えば歌人あるいは詩人とも言える。前者の意味では，多くの俳句を残しており，後者の意味ではワーズワース，バーンズ，ブレイクなどを愛読していたし，連歌，狂歌の研究書，現代短歌叢書などをも愛読していたからそうとも言える。戦前に長谷川光二の所を訪問した者には，石川三四郎，望月百合子，長谷川伝次郎，東海林太郎，小宮山量平などがいる。

2．鶴居村チルワツナイから発信していた優れた数々の俳句

作品上からでは，俳人が適当であるが，またその自由さから言えば詩人的俳人であるとも言えよう。あの鶴居村チルワツナイの光二村は，長谷川光二によって釧路を越えて日本中に俳句を発信していたのである。その意味は，大正末期頃から芭蕉全集を取り寄せ研究し，正岡子規もまた読み，さらに昭和12年に仙台静座会の雑誌『坐忘』の会員，昭和13年から山口県下関の俳人同人雑誌『土』との交流と投稿連載，昭和31年からは東京・角川書店から『俳句』を取り寄せ研鑽していたからである。また北見時代と思うが『枯野』も読んでいる。とは言え，長谷川光二がいつから，そしてどこで俳句を勉強したのかは定かでない。幼少期から東京で俳句をたしなんでいたか，あるいは学生時代に仲間と一緒に俳句を楽しんでいたかもしれない。また長谷川光二の奥様の岩岡家の親戚には俳句を楽しむ人々がいたと聞いているのでそちらとの関係からかもしれない。

3．仙台静坐会への書簡（原文のまま）

「端坐思実相の必要」北海道　長谷川光二

先日は坐忘誌御送付下され，有難く厚く御礼申し上げます。皆様の御精進の程を拝承，小生も此際決心を新にして大いにやり度いと存じます。それにしましても貴兄の相変らずの，斯道のための御尽力を尊きことと御感服申しております。貴兄のお名前が見当たりませんが若しや雨琴とあるのがさうでありませんか，いよいよ本年も押しつまりました。世界の情勢が大分せまって来て居ります処へ又々支那の内乱が始まりました。誠に現々鬼は次から次へ迷ひの連続である様に見受けられます。岡田先生の御遺訓にしたがひ，端坐して実相をおもう必要を痛感いたします。先は延引乍ら御礼迄。

（『坐忘』第２号，仙台静坐會より，10頁　昭和12年６月１日）

「流汗悟道」釧路国　長谷川光二

拝復御健勝大慶に存じます。坐忘誌昨日頂戴拝見致しました。厚く御礼申上げます。

今夏は竹島先生御来道との御事，さぞ皆様御喜びの事と存じます。小生はあまりかけ離れた山の中に居りますし，近所には全然人手を得られず，夏中とほして牧草刈りと申す。雨天の外は一日も手を抜く事の出来ぬ仕事に従事いたしますので，先生を御中心のお集まりに，馳せ参じ得られませぬ事を残念に存じます。せめては真夏の炎天下，流汗悟道に没頭しつつ皆様の御精進のほどをお偲び申すことになりませう。敬具

（『坐忘』第８号，仙台静坐會より，32頁　昭和15年７月10日）（俳句は別項へ記載）

４．下関の俳誌『土』への書簡（原文のまま）

＜長谷川光二氏より手紙＞

牧場に出かけてゐる間におたよりがとどいて居りました。なつかしく拝見いたしました。『土』も牧場にて拝見，御上京のことお察ししてゐました。たびたびおたよりいただき『土』も拝見させて頂きます御好意にむくい，こんなものでもお目にかけたくなります。いづれ落付いたら又ゆっくり。末筆ながら支草先生の御厚情にもよろしく御禮のほど御願ひ上げます。

（『土』第４巻第１號，８頁より　昭和16年１月10日）

以下しばらく俳人長谷川光二の作品を堪能してもらいたい（年代順）。

Ⅱ．俳人長谷川光二の戦前の俳句－昭和13年から20年までの作品

＝無題＝

花畑　先ず草取らん　農夫哉

昭和13年（小宮山量平「菩提樹記－Ｋ・Ｈのこと」『一橋2598』昭和13年，158頁所収，同『千曲川－第２部青春彷徨』理論社，1999年，376頁再録）

＝鈴蘭の野＝

蒲公英を　騎りゆくにわが　騎りゆくに

若葉風　耳に切りつつ　騎りゆけり

草若く　犬の跳躍　やわらかく

薫風に　速歩（ダク）に抑へて　汗ばみて（雑誌受取後手書追加）

白樺と　鈴蘭の野は　馬あゆめ

ぜんまいは　駱駝の毛着て　野の聖り（雑誌受取後手書追加）

ぜんまいの　手ひかりを秘めて　薄みどり

昭和15年７月５日（『土』第３巻　第７號より。題は私が付けた。）

＝国の春＝

国の春　周易を繙きつゝ　年送る

（長谷川氏注・周はあの時代の名前の周ではなく，周易とは蜥蜴＜とかげ＞の事なりと書物で読みました。トカゲの色の変わるのにたとえてあの書物の名前となったのだそうです。大変面白い事です）

厄年も　もう一ときの　読書哉

釣洋　燈痢病痕や　爪寒し

（長谷川氏注・此の夏珍しく下痢のため臥床，其の際健康の程度甚だしく下ったと見え爪に痕ががつきました）

皇紀二千六百　煖爐に薪（たきぎ）　燃やしつぎて

天道を　地に遂げん　国の春に逢ひたり

＝冬ごもり＝

読みたさを　忘れて坐る　冬ごもり

夜の雪を　子とうかがひぬ　山住ひ

雪三寸　展べてやさしき　今朝の空

楢梢　まづ雪ぬぎぬ　風立たな

尾根の雪　聴く涓滴に　一乾坤

書肆遠き　だけはかこちぬ　冬ごもり

凍へ蜘蛛を　机（き）にそとのせて　煖爐たきぬ

昭和15年７月10日（『坐忘』第８号，仙台静坐會より，32頁。題「国の春」は私が付けた。）

＝菩提樹＝

菩提樹の　蕾見に来し　幹を撫づ

夕さりの牧　わが菩提樹よ　“マテシバシ”

心臓形（ハート）　小葉碧落に　白し蕾青

青眞珠　樹精こよひの　白よそほひ

たんぽゝの　毬水銀の　灯をともし

落日の　銀覆輪の　雲の峰々

菩提樹の　空高謄る　羊毛雲

離りゆく　高天菩提樹　炎えさゆらぐ

昭和15年８月５日（『土』第３巻　第８號より）

＝盛夏＝

炎書の　背たけの草に　炭窯燻る

青あらし　澤の焼子に　通はざり

俵づくる　汗に塗れ　炭に塗れ（雑誌受取後手書追加）

としごろを　つゝみぬ赤き　三角巾

天風呂　はちも浸りつま　日を照り（雑誌受取後手書追加）

湯に堕ちし　とものむくろを　蜂怒る（雑誌受取後手書追加）

燃料　報国第一線の人ら　世に遠し遠し

＝秋ちかく＝

殻をぬぎし　蝉のうす翅の　海霧にくもり

地下十年　夢の緑りは海霧に生る

たうきびを　攀ぢ若蝉の　海霧にふかれ

たまゆらの　夏うたはめや　海霧霽れず

＝立秋＝

病める妻　なだむることの　山住ひ

牧にしあれ　醫師なきことに　住み来り

妻病めば　みたりの子らを　數ふわれ

妻病みて　子らのおもざし　識るくはしく

まゝごとと　母の看護（みとり）と　けじめありや

束の間を　菜圃の雨におもひ無し

海霧いなず　立秋暖爐を　子がたきぬ

北風たてり　海霧驅り黍たふす　妻よ起て

昭和15年９月５日（『土』第３巻　第９號より）

評・選句雑記　支草生（二階堂支草）
長谷川氏は「土」誌上へは新人作家だが，作家としては既に豊富な才能と技術の持ち主であるように思われる。今月投稿の作全部を通じて敬服すべき黒馬的力倆を提示して居られると思ふ。詩魂と新精神の鮮真さ独自性に瞳目させられる。更に重厚な叡智的なリアリズムに裏づけられてゐる點を共感していい。作家的基盤は此の方面から多分に期待出来ると思ふ。『土』第３巻９號より，昭和15年９月５日

＝秋＝

味噌汁は　濃くてもいゝよ　もう秋です

コスモスの　窓にはまどほく　秋が来た

＝たうもろこし＝

たうきびの　倒伏（タフレ）を起す　ばさり秋

きび潜り　鋤（ウナ）へば瑞毛（ミヅ）に　花粉降る

風媒生殖　浄らきはまり　嗅ぐいのち

黍およぎ　緑にそまり汗おほふ

大白燈蛾（シロヒトリガ）　赤黒点点と　観て殺す

昭和15年10月５日（『土』第３巻　第十號より）

前月作品合評（支草，伸，己喜男，小夜）
支草－長谷川氏の作は今月も皆いゝ作です。「味噌汁」などうまいもんだ敬服する。
（『土』第３巻第11號より，15頁）

１．プロも顔負けの俳句水準と評価される長谷川光二の作品

「他人に見せびらかすような人ではなかった長谷川光二の生き方」

一夜にして俳句や詩の創作が上手くなるのではなく，天才でなければ，日々の努力以外に方法がない。長谷川光二俳人の作をじっくり拝読するとあの鶴居村チルワツナイの生活そのもので，どこにも逃れる気持ちがなく深い深い森の聖人として森の精を熟成させたと思われる。国を思い，森を思い，友を，妻を，子供を思い，世界大戦を思う日々を過ごされ，鶴居村チルワツナイの光二村から文化，芸術，音楽を発信していたのだ。

しかしその姿を理解，解釈出来た人の少ない。私はこれまで「長谷川光二は，あの鶴居村チルワツナイでただ生活していただけで，特に文章や書き物もないので特別にたいした人物でも

ない」と聞いていたが，その言葉を信じられなかった。と言うのも，やはり私が真剣になって調査してみるとそうではなかったからである。ただ何度も繰り返すが，長谷川光二と言う人間は自分のやっていることを，他人に見せびらかすような人ではなかったので多くの人は理解できなく，ただ噂が噂を呼び，噂だけが伝わっていったと思う。原野の俳人長谷川光二は，鶴居村チルワツナイで，静かに世界や宇宙，さらに釧路湿原を詠んでいたのである。真剣な生き方であったからプロも顔負けの俳句がほとばしり出たのだと想う。しかもきつい労働の日々の中からである。

以下に再度，長谷川光二作の俳句を載せておこう。

＝花火＝

草の戸を　子らの花火に　呼びいだされ

国のはて　螢と花火　かそけくて

鳴く虫と　森の花火を傷むめれば

流れ星　つと胸つくよ花火消えぬ

子らは生き　闇黒（やみ）に花火　あらがはせ

花火消ぬ　すでにすでに　子らの人生（このよ）

たゝかへり　子ら無意識に　花火咲き

濁り世を　清（すま）しめをさなき　いのちながれ（アミエル）

花火もつ　指小さけれど　巨き眞理（ゆめ）を（ラスキン）

昭和15年11月５日（『土』第３巻　第11號より）

評・選句雑記　支草生（二階堂支草）
「花火」は多彩な才藻を持つ長谷川氏の断面を提示されたもので，氏の巨きな未来性を静かに味到したいと思ふ。

＝田園＝

海霧（がす）に濡れし　雑草を薙ぐ　わが誕辰

青蕃茄（とまと）香に　ゐて剪定　生れしけふ

指方立　相こゝが浄土の　草むしり

＝牧場＝

草鎌と　花野いゆきぬ魂祭

南風(はえ)あらき　萩のうねりを　子も縫ひて

澤ごもる　楢鳴りぞめき　角塔婆

子らが摘み　干草を供へ　刈る鬱はす

祖霊招び　われら唱べば　南風と蝉

野を拓き　こゝの聖地をまづ　さだめしよ

雪に星に　塔婆は古りぬ　夢やおほしゝ

牧蒼々　生を聖とのみ住み　抜くべし

白雨(ゆだち)虹　麥濡堆(ぬれには)竝む　風景

二重(ふたへ)虹　鶴も棲ひて　聖家族

昭和15年11月５日（『土』第３巻　第11號より）

前月作品合評（支草，伸，澄江，小夜，一枝）
支草－長谷川氏の作品には感傷性のない抒情味が有る。抒情はともすると甘くなつたり，軽薄になつたりするものだが，とにかくこの人が俳句にもつと深く入つたら怖るべき作家になると思ひますね。（『土』第３巻第12號，10頁より）

＝秋晴＝

秋晴れの　朝なればわが　顔を瞻る

鏡中の　森翳すみて　鳥鳴ける

露冷えし　緑草鶏の　冠(かさ)あかく

秋陽浴ぶ　山あかるしと　子が戀ふる

さをの穹窿(そら)　フランス人形　脚肉紅(ほのか)

煙突の　けむリ撓みぬ　時空の撓み

アラツディーン　洋燈ピアノの呪縛　秋の森

秋晴れの　こゝろ一應　閉ぢてみる

昭和15年12月５日（『土』第３巻　第12號より）

前月作品合評（支草，伸穂，九峰，小夜）
支草－長谷川氏非常に複雑性を持つている。九峰－情操が豊かなんですね。支草－豊か過ぎる位，為に一句としてずばぬけて強力といふものがかけているかもしれん。伸穂－妖怪だ。支草－たくましき幻想だ。（『土』第４巻第１號，14～15頁より）

2．プロも顔負けの俳句水準と評価される長谷川光二の作品（続き）

＝ベートフエン第九の合唱＝

これの調べに　あらぬ調べとは　唱(うた)へども

肉聲の　あまりに肉聲　愛慾薫り

人間　荘嚴大地に　誇るかな

熱情を　祝がんわがどち　葡萄燃ゆ

秋光に　汗ばみて馬鈴薯(いも)　掘り盡さん

天上の　幻影(ゆめ)草の實と　風に乗る

悦びよ　さなり克ち獲し　悦びなり

おもへ倫敦　空襲人間科學の　光芒を

楽聖の　祖国幻想(くにゆめ)を　克ち獲ん日いつ

昭和16年１月５日（『土』第４巻　第１號より）

＝田園仲秋＝

名月の　寒しあしたの　初霜(しも)をおそれ

湯の窓に　濡れて歪みて　けふの月

灯を吹いて　障子を白うせる　良夜

月の窓　想ひは老ひし　友の破産

世を慍る　われに月の句　みな古るび

月光に　打坐身は一片の　夢と冷えぬ

森に目醒め　月下の山に　雲霧戀ひ

名月の　ありあけ草を　撫でつ木靴(さぼ)

＝微恙＝

風邪ごもる　煖爐のけむり　草に這ふ

暁の森　煖爐のけむり　霧を縫ふ

牧二戸の　けむり樹立に　相會へる

霧とけむり　樹立さんさん　刺す朝暾

初霜(しも)未だ　コスモス餘命を　いとゞ濡る

こくわ熟れ　熊の知らせも　他事(ひとごと)に

楢紅葉　うつろふひまを　風邪ごもる

秋山の　賦彩の工唯（たくみゆい）　驀地

朝湯浴びし　餘勢も南風（はえ）に　壓され臥しぬ

昭和16年２月５日（『土』第４巻　第２號より）

＝星座＝

颱風過　星ひさに數（よ）む　涼夜

コスモスの　窓の灯に佗ち　星座表

玻璃越しに　子も笑みこぼれ　星と遊びぬ

西賢の　“星と人間”やゝ嚴（いか）しく

体系の　整然と美（は）しきや　大動亂

天の川　森に横たへ　螢生き

鳴く虫や　満地満天　星飾る

昭和16年３月５日（『土』第４巻　第３號より）

＝秋夢＝

三人に　コスモス十本一本　切り過ぎ

白鳥が　追つてくるのよ　しつこいの

亡き友の　病癒えたり　肩を組み

よき室に　二つのピアノ　競奏曲

坂の上　白い家から　碧い海

赤とんぼ　花壇は乾け　秋日澄め

夢おのも　山の牧ばは　けふも霧

飼猫の　分娩あこら　おろき無く

船乗の　三毛の雄猫を　夢も子ら

昭和16年４月５日（『土』第４巻　第４號より）

＝霧＝

霧幾日　活機ゆるみ　たるおそれ

霧の朝　こんこん心頭　ふまへ坐しぬ

霧壓せる　圃場をのがる　惰心にあらず

霧夕べ　つまのまろじした　のめあれど

霧の宵　活字に興味　持ち得ざる

霧一日　意慾のよろひ　今か放とき得し

霧夜　半虚空に捧げ　わが涅槃

青い花の　群落ゆ天　霧らす地を

霧ひたひた　地霊ぱやくな　眞夜霧笛

昭和16年5月5日（『土』第4巻　第5號より。題は私が付けた。）

＝牧場の生活＝

十年を　一夜に語り　朝露に

秋風や　五尺の体躯（からだ）　不足あらじ

いつぱいに　生きればねと　秋祝ぐれ支（雑誌受取後手書追加）

草の實と　決意いくたび　いのちぞも

感傷の　一瞬秋の　野のわかれ

鵙遠音　人間（ひと）の天性（さが）　懶惰ならめや

秋雨を　聽き句をあたゝめて　朝寝よき

日に新らた　煖爐の燃り　かゝげよき（雑誌受取後手書追加）

コスモスの　窓歌集おき　炊ぐよき

朝寒や　わこ膝にのせ　撫でるよき

癒えし妻　せはし朝餉に　せくもよき

上廁して　まなかひ牧の　牛もよき

秋ざくら　子らと花弁を　數（よ）むもよき

昭和16年6月5日（『土』第4巻　第6號より。題は私が付けた。）

前月作品合評（支草，一枝，伸，澄江） 支草－長谷川氏はいつもながら達者ですね。（『土』第4巻第8號，12頁より）

3．原野の俳人長谷川光二と画家佐々木栄松の奇縁，そして久保洋青の『えぞにう』

ここで取り上げた長谷川光二作の俳句は，釧路地域では誰も知らなかったものである。これまで本や手紙で話題になっていたものは吉田徳夫編『長谷川光二句集－郭公幻想』（私家版，平成14年11月）に掲載されているので両方を合わせて読むと良いでしょう。ただし吉田徳夫編の俳句集はまだ年代別に区分されていないので長谷川光二の精神的変化を捉えるには不十分。

多くの俳句は，戦後の昭和20年以後のものである。長谷川光二は，1945年以降の戦後に釧路地域で活動していた俳誌『えぞにう』の存在は知っていたが，長谷川光二の活動は俳句創作活動から見て特に昭和10年代から20年代であったためにそれほど関心を示していない。その理由は判らないが，ただ長谷川光二の書斎に昭和23年頃の『えぞにう』が3－4冊あったのは事実である。そのころ鶴居村には『えぞにう』の久保洋青（郵便局長）がいたので彼が届けたのかも知れない。その『えぞにう』の表紙画は，釧路地域で画家として有名な佐々木栄松が描ている。その佐々木栄松が晩年の長谷川光二にチルワツナイで会っているのだから不思議である。佐々木栄松はイトウ釣りに行って道に迷い，宮島岬に立ってみると下の方に煙が出ている家があったので訪ねて，泊めてもらい，それから「白いイトウ」についての文通の話が『湿原のカムイ』（二見書房，昭和55年，237－243頁）に載っている。今でも鶴居村には『えぞにう』の伝統を受継でいる俳人が，長谷川光二とは別の流れだが多くいる。時々彼らは凍原社の指導を受けて俳句を詠っている。

Ⅲ．俳人長谷川光二の戦後の俳句―昭和21年から34年までの作品

昭和19年頃から21年の間は，第二次世界大戦を前後していたために，物資不足で生活の困窮期であった。昭和21年には，商大の先輩で，バーンズ研究の第一人者の中村為治，昭和22年には，東京高等師範付属小・中学校の後輩で一高や戦後の東大・駒場のフランス文学の教授・市原豊太が長谷川牧場を訪問している。昭和26年には市原豊太と共に，北大にいた中国文学者の伊藤漱平などが長谷川牧場を訪問している。これらの訪問者と共に，長谷川光二は俳句や歌仙を作り楽しんでいた。以下に，戦後の長谷川光二の俳句を楽しんでもらおう。

＝師を見舞う＝

小さき花　野に限りなし　師病み給ふ

青麦の　穂波に祷る　師病み給ふ

昭和22年8月（市原豊太「ある牧場の主――長谷川光二のこと」『心』昭和27年4月号，65頁，同『校内校外』白水社，1953年，179頁再録，同「山蔭の家」『内的風景派』文藝春秋，昭和47年3月，484頁再録＜本書では2句の内，前句のみ掲載＞。題は私が付けた。）

＝無題＝

騎りゆくに　鞭は若葉の　枝手折り

鐙押す　仔馬と並び　花の野へ

世に遠き　鈴蘭を摘む　いとまあれ

鈴蘭を　切子の玻璃に　白き卓布に

灯しびは　鈴蘭の香りに　聴くショパン

昭和25年６月10日（長谷川光二から吉田徳夫への私信より）

＝山荘句日記＝

騎りゆくに　鞭は若葉の　枝手折り（昭和25年６月10日付，長谷川光二から吉田徳夫への私信と重複）

鐙押す　仔馬と並び　花の野へ（昭和25年６月10日付，長谷川光二から吉田徳夫への私信と重複）

世に遠き　鈴蘭を摘む　いとまあれ（昭和25年６月10日付，長谷川光二から吉田徳夫への私信と重複）

遠郭公　友が忘れし　杖軽く

明け暮れを　また郭公と　森蔭に

静ごころ　揺れず郭公　観を練り

灯しびは　鈴蘭の香りに　聴くショパン（昭和25年６月10日付，長谷川光二から吉田徳夫への私信と重複）

薔薇の香に　憶ひ出は　憶ひ出を越えて

昭和26年４月（長谷川光二「山荘句日記」『カルチヤァつるい』２号より）

＝郭公幻想＝

今ぞ今を　うたう郭公　餘念なく

郭公の　こころ知らまく　夢といはなく

静ごころ　揺れず郭公　観を練り（昭和26年４月　長谷川光二「山荘句日記」『カルチヤァつるい』２号と重複）

郭公と　時の巌を　うがち得ば

縦横に　緑を截りて　郭公と

郭公と　六道めぐり　道しるべ

昭和26年７月４日（長谷川光二から吉田徳夫への私信より）

＝薔薇の牧＝

紅野薔薇　牧に溢れぬ　うつつなし

雲うごく　明暗うたふ　薔薇の牧

薔薇の香に　憶ひ出は　憶ひ出を越えて（昭和26年４月，長谷川光二「山荘句日記」『カルチヤァつるい』２号と重複）

荒野薔薇　咲き牛の　苑囿（そのの）となる

これぞ薔薇の　径（こみち）よ行かん　何処までも

昭和26年７月４日（長谷川光二から吉田徳夫への私信より）

＝無題＝

森遠く　佳き囀りを　聴きわけぬ

森深く　紅野うばらの　香に酔いぬ

昭和26年７月４日（長谷川光二から吉田徳夫への私信より）

＝孤独感＝

住み古りぬ　山荘にまた　初郭公

家びとは　みな町に去り　初郭公

書き送る　遮莫文書くすぐや　初郭公

李花白し　古き友の急逝　初郭公

昭和31年５月頃に吉田絃二郎死去の報に触れて作る（宮内秀雄『高校から大学への和文英訳のこころ』大修館，昭和31年の中に新聞の郵便発送用帯に走り書きしていたもの――平成14年11月私が調査中に発見。題は私が付けた。）

＝無題＝

初郭公　せくなけだしや　音をのみぞ

郭公や　いのちのあるじ　夢さめよ

裏返せ　表にこころ　聴く郭公

進一歩　とわの今に居れ　初郭公

何かある　生死表裏の　歌郭公

昭和32年６月11日（長谷川光二から吉田徳夫への私信より）

＝無題＝

覚めがての　まだきの夢に　初郭公

たわれ夢　趁ふわれなるか　初郭公

草苺　紅玉の夢　初郭公

郭公や　耕馬つくづく　老いの痩せ

じやめ老馬　少年魯鈍　初郭公

初郭公　けふ山畑に　豆蒔かん

昭和33年６月12日（長谷川光二から吉田徳夫への私信より）

＝直言＝

遠来の　友の諫言（かんげん）　耳よ順へ

昭和33年７月－商大時代の旧友・笠原氏チルワツナイ来訪時作（昭和33年９月１日　長谷川光二から吉田徳夫への私信より。題は私が付けた。）

＝無題＝

独り居て　聴く初郭公も　さりげなし

昭和34年５月31日（長谷川光二から吉田徳夫への私信より）

（伊藤追記）「戦後の俳句――昭和21年から34年までの作品」に記載されている俳句は，吉田徳夫編『長谷川光二句集－郭公幻想』（私家版，平成14年11月）から転載したものである。ただし原資料に一句一句精査して誤記と思われるところは訂正した。さらに約10句は，原資料がなく精査できなかったので本書に転載しなかった。

おわりに

この調査・研究では，長谷川光二が原野の俳人として活躍していたことを証明しようと努力してみた。彼は，東京から関東大震災を契機に北海道の釧路湿原の北側，チルワツナイに移住し，牧場経営，家族を育てあげ，そして俳句人生を送っていた。一生をその地で過ごしたのである。昭和50（1975）年に76歳になり，釧路湿原の聖人となり，美しい丹頂の鶴の羽に乗りながら，魂は釧路湿原に昇華していったのだである。人間の生き方を示しつつ。（Itow/2003/10/28）

（長谷川光二に関わる参考文献と資料）

吉田絃二郎『木に凭て』新潮社，大正12年２月，25頁。
吉田絃二郎『静かなる土』新潮社，大正15年10月，37－41，103，253－262頁。
吉田絃二郎「北見の友へ」『わが詩わが旅』早稲田大学出版部　昭和３年11月，203－211頁。
吉田絃二郎『人生遍路』（角川文庫），角川書店，昭和26年６月，10－11，16頁。
吉田絃二郎『夜や秋や日記』第二書房，昭和33年12月，37，57－58頁。
斉藤兵市「つるはしないの人々－夢をもとめて」『鶴居村－地域社会の研究』　北海道地域社会研究会，昭和27年５月，97－101頁。
尾高朝雄「チルワツナイの友」『暮らしの手帖』第17号，昭和27年９月，104－105頁。
市原豊太「ある牧場の主－長谷川光二」『校内校外』白水社，1953年10月，170－184頁。
市原豊太「友達」『内的風景派』文芸春秋，昭和47年３月，260－270頁。
市原豊太「鶴の婚禮」『内的風景派』文芸春秋，昭和47年３月，476－484頁。
宮田時男『チルワツナイ・長谷川牧場』（私家版）平成元年。
盛厚三「原野の思索家　長谷川光二（戦前編）」『釧路春秋』　1992年11月。
盛厚三「原野の思索家　長谷川光二（戦中，戦後編）」『釧路春秋』　1993年５月。
能勢馨司『鶴の村のデクノボー』北海道新聞社，1993年１月，139－152頁。
大木文雄「ハインリヒ・フォーゲラーの総合芸術と長谷川光二の生涯」『北海道教育大学紀要』平成９年２月，63－67頁。
大木文雄「釧路湿原の長谷川光二」『北海道教育大学紀要』平成９年２月，69－84頁。
小宮山量平「長谷川牧場」『昭和時代落穂拾い』週間上田新聞社，1994年２月，126－７頁。
小宮山量平「菩提樹記をふたたび」『千曲川』（第２部青春彷徨）理論社，1999年６月，330－378頁。
小宮山量平「再びチルワツナイへ」『千曲川』（第３部青春回帰）理論社，2000年10月，84－110頁。
小宮山量平『千曲川』（第４部青春新生）理論社，2002年４月，46頁，170頁，180－183頁，296－302頁，341－348頁。
吉田徳夫編『長谷川光二句集－郭公幻想』（私家版），平成14年11月。